

---

# 隣に寄りそえるだけでいい

阿尾丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

隣に寄りそえるだけでいい

### 【Nコード】

N8403S

### 【作者名】

阿尾丸

### 【あらすじ】

雨宮 直は看護師として駆け出したばかりの新人。しかしつい一ヶ月前に母が再婚し、急に義理の父と弟ができた。それは、5歳年下の初恋の相手だった。

## 1・義理の姉弟

私の名前は兩宮 直。22歳。

ついこの間看護師の国家試験を合格し、看護師として病院に勤務しだしたばかり。

まだ駆け出したばかりの赤ちゃんのような新人である。

そんな私の母が、最近50代にして再婚した。

私の知らぬ間にだが、私も良く知っているお隣さんだった。

お隣さんと軽がるしく言ってしまった、超ビツプな人と、だ。

外国にも名を轟かせる一流ブランドのザリエンス・コーポレーションの社長さんだ。

結婚式にも呼ばれたし、母の着付けすら手伝ったというのに。

私にはその現実味がまだまだわかないでいた。

なぜなら、相手方の社長さんにも母に私がいたように、息子がいたのだから。

義理とはいえど、私に弟ができたのだ。

それも、5歳離れた、私の初恋の相手なのだから。

\*

信じられないのは、母が結婚して一週間ほどして外国に行ってしまったことだ。

社長さんにはちゃんと世話係がいるし、部下だって沢山いる。

ただ、母が社長さんの側にいただけだろう。社長さんもそれを望ん

でいた。

今回の仕事先はフランスで、数ヶ月帰ってこれないなんて、いきなり発つ前日に言われても。

私はすごく困った。

母と2人で住んできたアパートは、一人では広すぎる。

まだ駆け出したばかりの私を、一人にするなんて。娘のことが心配ではないのだろうか。

だが、私には女として輝きを取り戻した母を、止めるなんて出来なかった。

本当に嬉しそうな母の表情を、父の死後久しぶりに見たきがした。

「ただいま」

私は時計の針が10時を回る頃、ひっそりとしている自分の部屋へと帰宅した。

今や母がいないため、暗いし寒いし、大半の時間誰もいない部屋となっていた。

母がフランスへと発って早一ヶ月が過ぎようとしていた。

そのためか、「ただいま」と言ってしまう癖は直らないものの、「おかえり」と返事が返ってこないことには、慣れてしまっていた。

父が他界したのは私が中学生の時だった。ガンだった。

母は一週間ほど泣きはらしたが、一週間が過ぎた次の日からまるで何事もなかったかのように過ごした。

笑顔を絶やさず、女手ひとつで私を大学まで行かせてくれたとても強い女性だ。

しかし、そんな母をいつからか支え続けていたのは社長さんだった。まさか結婚するほどの関係になっていたとは知らなかったが、それ

でも確かに母にとって社長さんは特別な人になっていった。  
私が高校を卒業した時も、大学に受かった時も、社長さんはお祝い  
してくれた。

だから、今更反対する気もなければ、違和感を感じることもないの  
だが。

ただ、私は驚いているだけだ。  
どうしてこんなことになったのだろうか。

「秀平・・・は帰ってないよね」

静まり返った部屋の中を見渡しても、人の気配はない。  
誰かが一度帰ってきた痕跡もない。

元母が使っていた部屋には、今や違う住人がいる。

慣れっこだが、その住人はなかなかこの部屋の馴染もうとしない。  
馴染もうとしないのか、私が嫌いなのか。それとも、元々そういう  
人間なのか。

ただその住人について知っていることといえば、火遊びが激しいと  
いうことぐらいだ。

私はキッチンに戻り、自分の食事の準備をした。

もう10時を回っているのだから、体の疲労は限界だ。  
なにせ、遊んでいてこんな時間になったわけではないのだから。  
看護師といえど新人。覚えることが山のようにあって、この一ヶ月  
帰りの時間はいつもこんなものだ。

当直などに当たってしまえば、帰宅は翌日になるが。

すぐ出来る料理を作った。それも2人分。ひとつは自分の分。もうひとつはいつ帰ってくるか分からない、住人用。しかしその住人は二晩と部屋を空けることはない。一晩帰ってこずとも、朝には帰ってくるのだ。まるで家出犬のようだ、と私はふと思った。犬は絶対に家を忘れな  
いと言うではないか。

ふと、そんなことを考えながら食事をしていると、頭がキンキンしてきた。

元々頭痛持ちで、ストレスがたまると頭痛がおこりやすい体質なのだ。

ハードな病院の仕事が始まってからというもの、頭痛がほぼ日課になっていた。嫌な日課だ。

始めの頃は耐えていたが、しばらくはつてもおさまらないことが最近は多くなってきていた。

そのため、市販の頭痛止めを買うことも日課になり始めていた。

すぐさま自分の鞆の中から頭痛止めを探した。

しかし、探し求めたそれはなく、すでに空っぽの頭痛止め薬の箱だけが転がり出た。

「そういえば・・・昨日ので最後だったっけ」

ガツクリした。疲れしてる体で今から薬局まで行かなくてはいけないなんて。

覚えていれば帰りに買ってきたのに。そう、うなだれた。

薬局まで、およそ徒歩で30分だ。

私は居間のテーブルの上につ伏した。行きたくはないが、頭痛が行けと私を急かす。

どんどん頭痛が酷くなっていき、思わず私は目をつぶって堪えた。

その時フローリングを歩く足音が聞こえた。

はっとして顔を上げれば、母の部屋の新たな住人が私を見下ろしていた。

「なにしてるの」

端正な顔立ちに、どこかまだ幼い面持ち。茶髪に学校のブレザー。

彼こそが、社長さんの息子である木崎 秀平だ。

彼は無表情で、私に手を差し出してきた。その手には頭痛止めがあった。

なんとなくこの一ヶ月間、頭痛のことは隠し通せていると思っただけだ。

頭よくて勘のいい彼にはとっくにはれてしまっているようだった。私が薬を切らしていることさえ。

「ごめん・・・ありがとう」

「その言葉おかしくない？」

私の発した言葉に文句をつけつつ、彼は少し口角を上げて笑った。

それからキッチン方に消えていき、水入りのコップを持って再び現れた。

そして、それをテーブルの上に置いた。

「今日は早かったのね」

いつもなら私が眠った真夜中に帰ってくる彼が、日を越す前に帰ってくるのは珍しいことだった。

「そう?」

もう一度キッチンに行った秀平は、ついさっき私の作った秀平分の食事を持って戻ってきた。

彼は必ず私がつひとり分を作るということを、知っているのだ。

どんなに遅く帰ってきてても、彼は必ずそれを食べる。

だから、私は彼の分を忘れず作る。それが、最近あたりまえのことになっていった。

そんな彼の動作を見ながら、私は薬を口の中へ入れ飲み込んだ。

## 2・二人暮らし

一週間ぶりに母から電話があった。

「なんかお母さん、元気そうだね」

「あら？分かる？もう毎日忙しくってね！でもすっごく充実してるの！」

電話の向こう側との温度差に、少々疲労感も感じた。

それぐらい母の声は生き生きしていて、娘の私より若々しくてキラキラしてた。

「社長さんも元気にしてる？」

「そりゃもちろん！とっても優しくしてくれるのよ」

「そっか、よかった」

幸せそうな母の声を聞いて、頬がひとりでに綻んだ。

「それより秀平くんと仲良くやってるの？」

「まあまあ・・・ってどこかな」

ハハハ、と私は苦笑いを返した。

「上手くやりなさいよ。じゃっ！明日からまた忙しくなるから、次いつ電話出来るか分からないけど、仕事頑張っつてね」

「お母さんこそ、頑張りすぎないようにね。社長さんによろしく」

ふふ、という母の笑い声を最後に、私は電話を切った。

母と社長さんの出逢いは私が高校に入学した春だった。

父が亡くなって一年がたち、私が高校に通うために母の実家を出る事を決めた。

母の実家は田舎にあったため、通学には適していなかったためだ。もともと両親の反対を押し切って結婚したらしく、父方の親戚とは父の死後から絶縁状態だった。

現在は立派な豪邸に住んでいる社長さんだが、私と母がこのアパートに引っ越して来た頃は、隣の一室に住むお隣さんだった。

引っ越して来た当初、新しい住まいに不安を感じていた母を励ましてくれたのが社長さんだった。

そんな社長さんは駆け出したばかりの起業家で、毎日忙しく走り回っていた。

奥さんとは結婚してからすぐに離婚し、10歳になる息子と二人で暮らしていたのだ。

変な話だが、それまで誰かを好きになつた事のなかった私が、引っ越した日の挨拶回りで一目惚れしたのが、とても大人っぽい雰囲気をもとつた5歳年下の少年木崎秀平なのだった。最初「好きだな」程度にしか感じていなかった。

しかしそれが次第に、彼が年齢を重ねるごとに、本物の恋へと変わっていった。

私が高校を卒業し看護師の学校へ進学した頃、社長さん達はアパートを引っ越した。

会社が軌道に乗り、一軒家を建てたからだ。

しかしなぜか私達の住むアパートの隣の空き地を買い取り、そこに家造ったのだ。

今考えればおかしな話だが、きっとその頃から二人は心通わせていたのだらう。

社長さんと秀平が引越しても、お隣さんということに変わりはない。  
私達の付き合いはずっと続いていった。

\*

今日は静かな一日を過ごしている。  
昨日当直で病院に泊まったため、朝帰りをしたからだ。  
午前中いっぱい睡眠不足のためベットで横になっていたが、ずっと寝ているわけにもいかない。  
そう思いながらも、もう夕方の方の4時近い時間になっていた。

昨晩は秀平が帰宅したかどうかは分からない。  
もちろん、今日帰ってくるかも分からない。  
ただせつかくの休みなだから、ちゃんと買い物して美味しい物を作ってあげたかった。

最近秀平は時々家に帰ってこない。  
それは私と一緒に居たくないからなのかもしれない、なんてことは考えないようにしているが。  
それでも、ほんの少しでも考えずにはいられない。  
彼が何をしているのか、それを私が知ることは出来ないし、知る権利もない。

すぐ隣には彼の本当の家である豪邸があるというのに、なぜ彼はこんな狭いアパートで私と一緒に暮らしているのか。  
それは、彼の父親である社長さんが、その方が自分も心配しなくて

すむ」と彼を説得したからだ。  
それが彼の本来の意思とは違ったとしても、彼は必ずこの部屋の戻ってくる。

一日や二日部屋を空けようとも、夜遅くなるうとも、自身の本来の家ではなく、この私の部屋に。  
それだけが、今私の心の支えだった。

嫌われてはいない・・・という、あさはかな希望。

「あら、直ちゃん？久しぶりじゃない？」

「あっ大家さん」

スーパーマーケットまでの道のりを歩いている途中、私のアパートの大家さんに会った。

規則的ではない私の仕事のせいで、最近は全く顔を合わせていなかった。

「疲れた顔して、お仕事大変なんじゃない？」

「当直明けなもんで。すみません、化粧もしてなくて」

「そんなことはいいのよ！体には気をつけてね。若いからって頑張りすぎちゃダメよ」

軽く会釈して大家さんとわずか別れた。

今はあまり人と話す気分ではなかった。それほど、私は疲れているのだろうか。

確かに昨晚の当直は忙しくて休む暇もなかった。なにせ事故で緊急手術が行われたのだから。

俯いたまま歩いていると、ふいに声が聞こえてきた。

はっとして顔を上げれば、数人の女の子達とすれ違った。急に立ち止まった私を怪訝そうに見る学生服の女の子達。どうやら間違っただけで通学路に来てしまったようだ。しかも、あの学生服は秀平と同じ高校。

「なにしてるの、私」

目指していたスーパーマーケットとは真逆の方向に来ていた。ぼーっとしている自分にあきれてため息が出た。

仕方ないから、こっちの方角にあるスーパーに行こうと思いを切り替えた。

止まった足をまた動かして、少しずつ秀平の通う高校が近づいてくる。

また何人かの学生とすれ違う。そうすると、なぜか振り返ってしまう。

なんとなく秀平を探してしまうに自分に気づいて、前に向き直るけれど。

秀平の通う高校は、私の母校でもある。

懐かしさから、また立ち止まり校内を見てしまった。

誰かに見つければ、ただの変質者ではないか。

あれから数年がたった。色々変わったのだろうが、やはり変わっていない。

しかし眺めたのも数秒間で、私はすぐ向き直ってスーパーを目指した。

角を曲がって、また数人の学生とすれ違った。

「直」

誰かに呼ばれた気がして、私は立ち止まって振り返った。そこには、制服姿の秀平がいた。

「今日はやめとくよ」

一緒にいた友達らしい学生達と軽く挨拶を交わすと、私に近づいてくる。

すると、学生達は手を振りながら反対方向へと歩き去って行った。

私は驚きで思わず身をすくめた。

「なにしてるの」

「買い物・・・かな？」

「仕事は？」

「昨日当直だったから、今日は休み」

力なく微笑んで返すが、秀平はいつだって無表情のままだ。

しかしその端整な顔立ちは、笑わなかったとても魅力的だった。

「だから昨日いなかったんだ」

眩くように言った秀平の言葉は、昨日秀平が家に帰っていたことを表していた。

「ごめんね」

思わず私は謝ってしまった。

ばたばたしていたため、秀平の夜ご飯を作らないで仕事に行ってしまったからだ。

心の奥底では、秀平はもしかして帰って来ないんじゃないか、と疑っていたのかもしれない。

「なんで」

無表情だが、私を心配するような口調。

「夜ご飯・・・作り忘れちゃったから」

本当の事を言えば、作り忘れたのではないが。

他の事を言っても、なんだか言い訳をしているみたいで嫌だった。

「そんなこと気にしなくていい。買い物行くんでしょ？」

「うん・・・ごめんね」

再度誤った私を見て、秀平は小さなため息を落とした。

「俺も買い物手伝うから、今日はクリームパスタ作ってよ」

はっとした。

彼と買い物をするなんて小さい頃以来だ。

そして要するに、今日は彼と一緒に夕食をとれるということだ。

しかも、彼の大好物のクリームパスタ。私の得意料理のクリームパスタ。

「うん」

私は満面の笑みを返した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8403s/>

---

隣に寄りそえるだけでいい

2011年12月7日22時53分発行